

# モンテッソーリ教育における子どもの「静粛」

## —— 教育的観点からの考察 ——

保田 恵莉

### 序

騒音の中で生活する現代人は、周囲の音に対して鋭敏さを欠き、静けさをあまり意に介していない。それが騒音に慣れた結果なのか、初めから騒音の中で生活し、これが然るべき状態と観念しているためなのか、理由はいずれにしても現代人と騒音は表裏一体をなしているかのようである。イタリアの女性医学博士マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori: 1870-1952) は、そのような人間の生活には「静粛」が欠けていることを著書『幼児の秘密』の中から追求し、教育的観点からその必要性を指摘した。

私たちに身近な震災においては、2016年4月に突然起きた「熊本大震災」がある。2011年3月に起きた「東日本大震災」から6年余りが経過し、人々は平和を祈り、黙祷を続けてきた。

筆者が訪れる認定こども園などでも、失われた尊い命の話聞いた後、幼い子どもたちが両手を合わせて黙祷をする場面に遭遇することがある。祈りが終わり、閉じた目を開けた時、子どもは何とも「よい顔」を見せてくれる。このように、「静粛」な時は、子ども達に何かを感じとらせ、人と協調することや、人と悲しみ・辛さを乗り越えていく精神を生んでいるものではないかとも思う。

## I. 研究の目的

### 1. 「静粛」の意味

本稿では、モンテッソーリが、「静粛」を教育的観点でとらえていることに着目し、「静粛」の意義を探求することを目的とした。日本国語大辞典によれば、「静粛」とは「もの静かにつつしんでいること、ひっそりと静まりかえっていること、また、そのさま」と記してある。

また、新国語中辞典及び広辞林によれば、「静かでシンとしていること、静か

に慎んでいること」と記してある。これらのことから、「静粛」とは、一見静かな状態を意味しているようである。これに対して、モンテッソーリは「静粛」を教育的観点でとらえている。

つまりモンテッソーリによれば、「人間は静けさを知らないので、普通、静けさはある程度騒ぎを小さくする、少し雑音を減少することと間違えやすいが、教育的観点からは、静けさは非常に高度の内的価値をもっており、自己完成に到達するために絶対に必要なものなのである」と捉えている。

そして、モンテッソーリは、子どもにとって「静なる時」とは「偶然に動かなかつたり、黙っていることではなく、段々に到達される、完全で、音を立てない、足を動かし、手で撫でたり、または聞こえる呼吸などの際に起こす最小の物音もたてない完全さである」ことを述べた。「絶対の静」は、「絶対の動かぬこと」にあたるのではないかと述べている。したがって、モンテッソーリの考えによれば、子どもが「静粛」になるということは、動きのすべてを自由意思によってチェックする楽しみと、意志の努力によってもたらされた静かな時と、不動によってもたらされる沈黙の喜びを求めることなのである。

さらに、モンテッソーリは、人間の生活には「静粛」が欠けていることを指摘した。精神的に高いレベルにある人や、優れた業績を残した偉人たちが皆が静かな時を必要だと感じたとしても、静かさは依然として欠けている。この現実を無視することは、人間にとってどうでもかまわないことではないことを告げている。現代に生きる我々を予見したとも考えられるモンテッソーリの言葉は、静かな時が如何に大切なものであるかということを切実に語っている。このようなことから、改めてモンテッソーリの「静粛」の意義と、関連した現代における乳幼児教育に関する静かな時の適用について、考察することにした。

## 2. 「静粛」の表現概念

「静粛」の表れの起源については、モンテッソーリの著書『幼児の秘密』に詳しく述べられている。モンテッソーリは、生後四カ月位の赤ん坊を抱いて子ども達に向かって「みなさんは足をこの小さな赤ちゃんのように静かにジューとできるでしょうか。赤ちゃんの息が聞こえるでしょうか。音をたてないで息をすることはできないでしょう」と呼びかけている。これに対して子ども達は、赤ん坊を見て真剣な顔と仕草をもって応えたのである。モンテッソーリは、印象深い静かさがこの瞬間に広がったことを述べているが、この静けさの体験は、全ての子ども達に繰り返すことを望み、行ったのである。

モンテッソーリは、「静粛」の表現を行う前に環境を準備することを絶対的な

前提として述べ、二つの条件を掲げている。それは第一に、子どもたち全員が教具を全部片づけ、クラス全員が沈黙する意志を有すること、もう一つは、快適な気分で楽な姿勢になることである。こうして、楽な姿勢になって全ての活動が静止したときに完全な不動に到達すると言えることを告げた。まさに、「静粛」の体験は、集団の中で皆が一致して同一目的をもち、一定の条件の下で自主的な全員の努力がなされなければ成立しない。しかも、それを実行するには、子どもにとって不可能と思われるほどの自制力が要求されるのである。

しかしながら、我々大人が「静粛」のレッスンを考える上で肝要なことは、子どもの自制力以上の影響力の存在に心を向けることである。すなわち、集団の子ども達が、静かに身動きをせず「静粛」のレッスンを可能にする内的要因である心内の一致忍耐力の前提条件の下で味わった精神的喜びの体験についてである。それは、子ども達の意志の力による静けさの中で味わう体験、つまり、Directress のかもし出す種々の小さな音、無声音の呼び声と動きの抑制、周囲のかすかな物音、自動車の思いもかけぬ大きな音など、沈黙の世界で外的環境の発見に心を踊らせる経験、更に、外的なものから心内の声にも耳を傾ける体験であると言えらう。

このことに関連し、スタンディング (E・Mortimer Standing 1887-1967) は、「春のくるのが聞こえる」、「自分の中で神さまの話している声が聞こえる子ども」を著書の中から紹介し、「静粛」の美しさについて詩人の言葉を借りて「最後の葉を風がかきよせ、その風を静寂がかきよせた」と記した。

### 3. 子どもにとっての「静粛」時の意義

イタリアの医学博士であるモンテッソーリは、一定時間の「静粛」時を発見した当初の自己の態度を次のように告白している。「もっぱら医者として、心理学者としてこの現象に取り組んだ。つまり、実験心理学者、臨床心理学者として取り組んだので、外面的な理解に戸惑ってしまった。子どもの聴力がどの程度の機能を果たしているか、誰かの聴力が多少とも遅れているか、何人の子どもが実際に優れた聴力をもっているかをわたしは知りたかったのである」モンテッソーリは、「静粛」時に自分を見つめる経験を重ねている。

周知のとおり、モンテッソーリの教育学は理論よりも実践が先行して編み出されたものであるが、「静粛」の表れも、子どもの生き生きとした精神の体験結果から獲得されたものである。モンテッソーリは、実践を通して静けさを愛する心が3、4歳児に強いことを観察し、実証できたことに驚くと、「静なる時間」は神の一つの啓示のようであることを子どもの家などの「静粛」の後に告げて

いる。

このように、モンテッソーリにとって神秘的な啓示の如く解された「静粛」の表れは、重要かつ意義深いものであることを裏づける証しとなった。

以下、外面的偶像内面的価値および人格形成の面からその意義について述べ、探求していきたい。

## II. 教育的観点

### 1. 外面的価値からみた「静粛」の表れ

「静粛」の表れは、子ども達が与えられた状況の中で「可能な限り静けさをつくり出すこと」を外面的目的としている。つまり、「静粛」は、動作の制御と衝動の抑制を発達させるものである。「自分の手や足の動きを完全に止め、じっとしていること」、「名前を呼ばれた時、音を立てないように静かにゆっくり動くこと」、あるいは、「最後まで自分の名前を呼ばれるまで待つということ」など、子どもにとって動作と衝動の抑制を強く要求することである。

しかし、子ども達は大人が信じられないほど完全にそれをやり遂げるのである。それは、繰り返しの行為により、子ども達が如何に動きを抑制する意志力を発達させるかを物語るものと言える。

次に、「静粛」の表れは、「音に対して敏感になること」について、述べることにする。子ども達が沈黙し静けさの状態に達すると、子ども達が立てた音でない自然界の音、鳥の鳴き声、大人によって作り出されたさまざまな音がクラスの静寂を破る。モンテッソーリは、「子どもたちは、雑音に最高に敏感になる」と述べ、日頃心に留めることのない物音が強烈な音に聞こえて来ること、通常聞こえたこともないかすかな音がはっきり耳に達することを指摘している。

音に対して非常に敏感になった子ども達は、歩く足音の大きさ、ドアの開閉の音、物を置く時の音など、日常生活の中での音に敏感になっていく。更に、「静粛」のレッスンの繰り返しによって音の段階を理解した子ども達は、日常生活における自己の態度に徐々に気づくようになり、自然に洗練された態度を身につけていくようになるのである。モンテッソーリは、「静粛」の表れは規律の練習である」と述べているが、確かに静けさに到達するためにはクラス全員の一致した意志の中で音と動きを停止するという自然法則を発生させなければならない。

つまり、一人の子どもの「静粛」の開始によって他の全ての子どもが直感し、

「静粛」のレッスンの行動へと移行し、更に、「静粛」が「静粛」を呼び、自然発生的規律をつくっていくのである。

「静粛」のときは、同時に、自由選択活動におけるクラスの規律を生み出す練習にもなっていく。それから、「静粛」のレッスンは、運動の分析や整頓に貢献する枠を完成することもある。運動の分析とは、継続して起こる動きを識別してその部分を正確にわけて実行することである。モンテッソーリによれば「運動の分析は運動の節約と結びつく」とも言及される。つまり、目的のために何の意味ももたない動きは整理する必要があるということがわかる。モンテッソーリの見解によれば、この運動の分析や整頓に寄与するのが、動きを停止し、抑制する「静粛」の表れなのである。確かに「静粛」のレッスンで名前を呼ばれると余計な動きを調整し、最小の動きをもってこれに応えることなどは、運動の分析に貢献する枠組をつくることであるだろう。

また、モンテッソーリは、その著書『子どもの発見』の中で次のようなことを省察している。環境が自分だけが調音と騒音とを出せるとき、人間のそんな環境への関係をわからせるのは聴覚の養成である。聴覚の養成について具体的に述べると、静かな時が不動に由来するものならば、運動によって起こされる確音が音響の知覚に達するためには、「静なる時」に出発点を持つことが必要となるであろうという推察が浮かび上がってくるはずである。

子ども達は、「静粛」のときにより、聴覚が訓練され、かすかな音が聞き取れるようになった時、音の相違、段階づけが可能になる。モンテッソーリ教育は、様々な要因や部分から構成された全体から実現している。そのため、一つの部分とか、要素だけを取り出す場合も、全体的な位置づけを見渡しておかなければならない。モンテッソーリ教育が現場において宇宙的広がりをも予感させる展開を実現する原点とも基本ともなる「日常生活練習」と「運動」を取り出すにあたり、「日常生活練習」が何においた教育内容であるだろう。このことから、モンテッソーリ教育全体のどこに「静粛」を位置づけるのかを確認し、また、「日常生活練習」と「運動」との関係性を明らかにしておくことが重要に思われる。モンテッソーリは、調音から騒音を区別してその相違に気付き、「その後、調音と異なる起源の異なる音色、人から楽器へ、そして、最後に音楽の音階に達する」と述べ、更に、聴覚の知覚を①静かさ ②話す人声 ③騒音 ④音楽の四種に小区分している。

モンテッソーリのこの見解から考察すれば、「静粛」の表れは聴覚を訓練し、沈黙を愛し、音への敏感さを経て、音楽という文化生活へと子どもを招く準備を整えると解釈することができる。

次の「図1」に「静粛」と「運動」の結びつきとその展開例を示した。

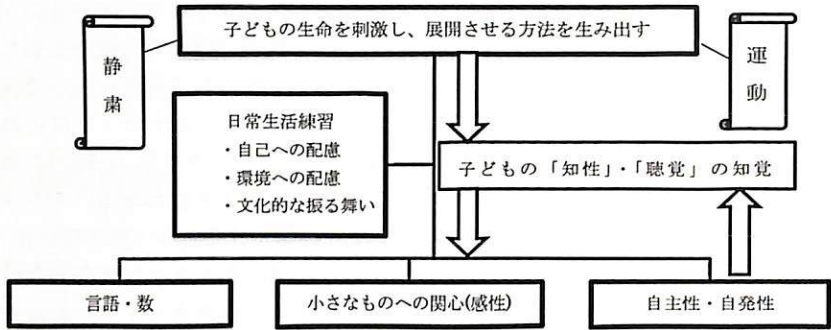


図1：「静粛」の根拠なる「運動」からの展開法

保田(2017.6月)作図：E・M.スタンディング著：クラウス・ルーメル監督、佐藤幸江訳「モンテッソーリの発見」E.M.STANDING MARIA MONTESSORI HER LIFE AND WORK (1975) pp.146-151参考

「日常生活の活動」は、単に幼稚園・保育所、認定こども園などの施設だけで行われるものではない。それぞれの子ども家庭の中で、親と子が互いの人格を尊重しながら身近な事柄に目を向けて、その中に取り入れて行くことが大切である。ところが、子どもを取り巻く多くの大人は、子どもの内に秘めている自己発達の力強いエネルギーに対して気付いていない。時に大人による思惑があるときは、子どもを不安にさせることもある。

「日常生活の活動」を通して、自己を発展させた子どもは、「一人でできるようになる」とことばかりでなく、やがて周囲に目を向けていく。子どもは「静粛」と、「運動」のどちらも身体に取り入れながら、やがて、モンテッソーリの願う「開かれた子どもの心」を知らず知らずに養っていくことができる。これらのことから、モンテッソーリが知能や感覚を測定することでのみ判断する測定主義の心理学の立場とはらず、数遊びの教具や子どもの発達を促すための道具ではなく、自己教育の手段を重視し、精神的に活動し、成長しようとする子どもを対象として上記のエネルギーに着目したことが把握できる。

## 2. 内面的価値からみた「静粛」の表れ

「静粛」のときは、静かさを愛する心を体得させるものである。そこには、子ども達によってつくられた絶対的な「静なる時」が必要である。子ども達全員が自由意思によって全ての動きを停止させると、そこには真の静寂が漂う。

その結果、子ども達は落ち着いた気分にもなり、静寂な気持ちを体感し、「静の時」を心地よく感じる」、同時に、自然体で「静かにしていきたい」という欲求を持てるようになるのである。更に、子ども達は、「静の時」間と空間を繰り返し望むようにも変わっていく。モンテッソーリは、子ども達が「静粛」のときを終えた瞬間、報酬として、チョコレートなどの菓子を与えようとしたが、子ども達は、「どうか私たちのきれいな経験をそこなわないでください。気持ちをそらさないでください。私たちは、未だ精神的喜びを味わっています。」と言おうとしているかのように、贈り物を受けることを拒んだという。それは、精神的喜びを体験した子ども達が、その充足感を物質的なもので壊されたくないということの自然的態度であったと考えられる。

子ども達が「静粛」のときを過ごすということは、自由と気楽さの中で自己の動きの全てを抑制することであり、動きをチェックすること自体が大きな喜びなのである。

さらにモンテッソーリは、精神の喜びを、子ども達がこの「静粛」の努力と興奮と喜びをした後、彼らは船のように港に達した。彼らは、新しいことを感じ、それから勝利を得て幸福であった。これが彼らの報酬であったことを表現している。

「静粛」の時間は、子どもの意志力を試す一つの方法を提供してくれるものである。一時、一時の静のときを繰り返すことにより、子ども達は、「子どものエネルギー運動」を活性し、意志が強くなり、子どもは自分の名前と呼ばれるまで待つという忍耐力を発達させていく。同時に、自分の名前がいつ呼ばれるかという注意力、「静粛」を破らないための動きと歩行への注意力、そして、集中力、これらの全てが子どもの自発性によって、征服されていくのである。

### Ⅲ. 「静粛」の今日的意義

#### 1. 「静粛」と協調性の発達

「静粛」の意義として、社会的団結力を発達させることにもモンテッソーリは着目している。「静粛」は、クラス全員が静かにしようという意思がなければ成立しない。モンテッソーリが、静かさは「集団的努力」を求めると述べているように、一人でもその気持ちがない場合には、「静粛」の場は不可能となる。しかし、子ども達は、Directressの何らかの指示によって、同一目的に向かって行動しようとし、経験により失敗の原因を体得し、訂正していく。そこには、体験により社会的な統一感が存在する。つまり、「団結しなければ成功

しない」という心が働くのである。換言すれば、「静肅」の時により、子どものある種の内部形成が進展し、社会性や特に協調心、広い意味からは、協同性が養われることになっていくのである。「静肅」のときによって、長い時間静を保ち、音をたてないで歩いたり、立ち上がったたり、腰かけたり、椅子を置き換えたりが自然にできるようになった子ども達は、神聖な場所に立ち入る用意が出来上がっていく。

モンテッソーリが述べるように、確かに子ども達の静の立ち振る舞いは、やがて定められた場所に品位と忍耐力をもって立ち入らせる準備となっていくのであろう。子ども達の集団により協調性が育っていく中からは、やがて宗教的感情を呼び起こすことさえ可能にしていくようにも思われる。

## 2. 「静肅」による柔順さの発達

モンテッソーリの考える柔順は、いわゆる「従順」と同一視していない。モンテッソーリの述べる柔順とは、相手を尊敬し、相手の優越感を認めた場合の自由意思による従い方である。すなわち、子どもは教師や両親の命令、指示に盲目的に従うのではなく、より高い次元の従い方をするのである。

モンテッソーリは、柔順さには発達上「三段階がある」ということを述べている。第一段階は「子どもは言うことを聞くことができたり、できなかつたりするること」である。そして第二段階は、「子どもは常に柔順でいられること」である。最後の第三段階は「子どもは、自分から見えて一段と優れていると感じる人に積極的に柔順さに向け、意欲をかりたて、一生懸命辛抱強く従っていくようになること」が挙げられた。モンテッソーリは、この三段階の柔順さを、集団として現れた現象、すなわち、静の姿を仕事(遊び)から経験している。

この仕事を捉えモンテッソーリは「子ども達は驚くべき、まったく予想もしない統一体となり、グループ全体がほとんど教師自身と一体になってしまった」と感じ、この時の情景を「忘れられないこと」と周囲に告げている。このことから「静肅」による子どもの柔順は、意思の発達における最後の段階なのであることが理解できる。

## IV. 人格形成による「静肅」の課題

1938年初秋、ラーレンにおける講演会で、モンテッソーリは「静肅」について、述べている。モンテッソーリ自身が養成コースの受講者と直接話し合いながら実践を指導したこと、また、彼女の数々の豊富な実践の体験から、そして、



「静の時間」の効果について、その重要性についても詳しく述べられている。モンテッソーリは、この中で静なる仕事＝遊びが、子どもの後の人格形成に直接関与するものとして『教育的観点から「静の時間」が非常に高度の内的価値をもっていること、自己完成を目指して非常に高い水準の知性へと到達するために絶対に必要である』と述べた。また、子どもにとって「静なる時」を持つことが、人格形成上、意義がある事を明確に述べているのは、著書『モンテッソーリ・メソッド』の中の「静粛」の時間は、運動能力と、精神的能力を含む全体の人格を整える仕事のための最も効果的な準備である」及び、著書『子どもの発見』の中の「品位あるしとやかな態度、無理のない動作は、彼らの辛抱強く骨折って手に入れた能力を高める贈り物である」という箇所である。さらに、モンテッソーリは、「静なる時」が、人格形成に影響ある具体例として「完全な不動、遠くからささやかれた名前の発音を機敏に聴く注意力、それから、椅子やテーブルにぶつからぬように、また、足の裏でわずかに触れるように遂行される注意深く調整された動き」を挙げている。これらの具体例は、やや外面的側面から見た点が強調されているかのようなようであるが、モンテッソーリは、内面的側面、つまり、精神の発達を決して軽んじているわけではない。外面の発達段階に応じて、精神の発達も、完成へと到達していることを強調している。同時に、「静なる時」における子どもの外面的行為は、内面的側面の表れとして考えられた。このことより、「静粛」の内的価値、すなわち「静なる時」を楽しみ愛する心、精神的喜び、注意力、意志力、忍耐力、社会観、柔順、宗教心など、これらは、外面的行為として表明され、両者が絡み合いながら、子どもは人格を形成していくと考えられる。

モンテッソーリが顕微鏡で草花の観察を行っていた時代から科学の進歩により現代では電子顕微鏡を用いてミクロの世界を知見できるようになった。しかし、我々は、未知の世界の広がりと同時にまだ解明されていない世界の大きさを想像し、果てしない宇宙にも新しい美の世界を思い描く。

では、子ども達の心はどうだろうか。筆者が専門とする絵画領域においても「静粛」の時間は潜んでいる。モンテッソーリは「描画という贈り物を受けるため、我々は見る目、従う手、感じる魂を創りだす。この意味においては生活そのものが描画のための唯一の準備である。そして、子どもは表現のための全て可能な方法を模索している<sup>1)</sup>。」とモンテッソーリは述べた。描画には子どもの生活経験が深く関与していることから、身体も心も全てがかかわる総合的表現であり、人格の基礎を大切に育むことを指摘されている。

「静粛」は、2008年に改定された幼稚園教育要領においても、諸感覚を働か

せて受け止められる体験であることを「内容」の中で示唆している。感性・表現の内容では「生活の中で様々な音、色、形、手触り、働きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ<sup>2)</sup>。」と示され、子ども達が生活の中で様々な事柄から刺激を受け、諸感覚を磨く経験から感性が養われることが理解できる。さらに、もう少し深い部分を考察するとするならば「人の痛みがわかり、眼を閉じて自然に祈るようになる」というように「静粛」の形を表すことができ、これらは「人格形成」の育ちとつながっていくことがわかる。

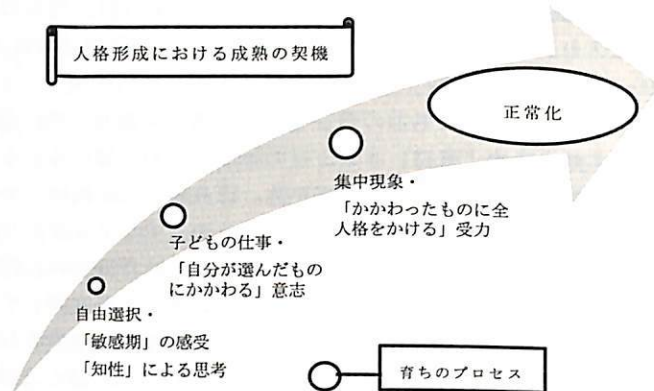


図2：「自立への過程」

保田 (2017.9月) 作図：「正常化とは、関わりを断ち切った後に自立する自己評価であること」を、『モンテッソーリ・メソッド』（1973）明治図書 pp.66-71を検証する－育ちのプロセスから捉えた。

観察、理論態度、子ども本位の考え方は、人格の組織化理論として、総括されている・モンテッソーリは、この理論を「人格の自己形成」と呼び、自己形成は子どもの秘密であること。また、子どもが次第に自己形成しているのを見せなければ、大人は子どもの心の秘密に入ることはできないことを述べている。

自己形成のプロセスは、直接に観察できないものである。細胞の絶え間なき活動によってのみわかると言われている。このことより、モンテッソーリは、非物質的写真であることや、隠れた心の主導的諸力だと述べている。同一の19世紀において活躍を遂げた精神哲学者ヘーゲル (Hegel) は、精神自体は見ることも把握できるものでもないが、現れるところで始めて、精神が働いていることが確認できることを明らかにしようとした。モンテッソーリもヘーゲルの論述と同じ思想を持ち、精神とは、深遠なところに隠れているのであり、動物

の本能のように現れることはないことを告げている。

## V. 総合的考察

現代における社会生活、教育界の中で、「静なる時」を自然に得ることが不可能に近い我々人間の中でも、とりわけ子ども達は、「静粛」に関する体験が非常に乏しいと考えられる。騒音の中で生活をする子ども達に「静の時間」を教えることは、大人や Directress に与えられた義務である。大人の後ろ姿を見て育つ子ども達は、はじめに述べたように、子ども自身には幼いため深くはわからない震災ではあるが、大人の手本を通して、真実の「祈り」の場面から「静粛」について、一瞬ではあるが体験する機会を得る。

「静なる姿」を自ら愛する心が乳幼児期に体験できた子どもは、人間として真に望ましい者として「自己発展」をしていく礎石を築き上げることができるであろう。その反対に「静粛」を無くしたとき、人は人として「何か大切なこと」を忘れていくような危機感も抱く。

人格の理論についてモンテッソーリは、創造する傾向が子どもに内在し、可能態としてのエネルギーが破損する過程では、子どもは様々な印象を受け、心の世界を建設できることを述べ、さらに、可能態としてのエネルギーが創造的諸力となり、子どもの身体に移行し、再び現れることを探求した。発達の途上において、敏感期にある子どもが求めているものを、環境のなかで見出すことが出来れば、集中してある事柄に挑むようになる。そしてこのような総験が度重なることにより、調和のとれた落ち着きが子どもの内面に育ってくるのである。生命の充実感と自己実現の喜びを味わった子どもは、品位のある顔、品位のある態度に変わり、「子どもは落ち着かないもの」という大人の偏見は見事に打ち破られ、子ども本来の美しい姿を見せはじめる。モンテッソーリはこのような「正常化」のなかから「静粛」を語り継いでいるとも推察できる。

「エネルギーは、自然を超えたものである」と考えたモンテッソーリは、エネルギーを神からの授かりものであり「超自然的なもの」と名付け、動物のように遺伝により固定した行動様式に従う者ではないという子どもの発見を重んじた。これら理論の積み重ねにより、「静粛」の教育的意義が明らかになってきた。

## 結

教育要領の改訂や、指針の見直しを根底に、新しい教育・保育に着目する我が国の保育者養成校では、質の高い教育を見直し、学生の根の部分育てようとしているが、年々、授業中に話が聞けない学生の姿が見られ、気がかりである。

ある日の授業前、静かに目を閉じて「静粛」を唱え、顔を閉じてまっすぐに立ってられない学生もいた。しかし、この時、ほとんどの学生が「静粛」の場面を経験した後に「何となく気持ちがよいこと」や「落ち着いた心になれたこと」を伝えに来た。

本論では、はじめに、筆者が幼い子どもたちが両手を合わせて黙祷をする場面に遭遇することがあることを述べた。祈りが終わり、閉じた目を開けた時、子どもが見せる何とも言えぬ「よい顔」について振り返ると、モンテッソーリ教育においては、教育の一療法ではないかとも考察する。モンテッソーリの教育理念は、全ての子どもに平等を供与される点に現代の教育学の意義を見出すことができることも根底のつながりにあるように感じる。

本研究では、この営みを生涯に亘り続け、報告として書き続けたマリア・モンテッソーリの著書を体系的な教育理論として分析していくことから「静粛」の意義について明らかにしようとした。「静粛」への教育的観点からは、モンテッソーリが発見した道筋を見極め、位置づけるようにしたが、まだ不透明な部分も感じている。この点、今後も「精神と発達の構造」に沿って要約していきたいと考える。

今、様々な環境で育つ子ども達や学生に対して、モンテッソーリが著書の中から述べている「静なる時」を重んじる場面を、数多く子ども一人ひとりに体験させていく必要があると改めて感じている。

その普及如何は、「静粛」を心地よいと感じられる教師のすべてにかかっているのではないだろうか。

注1：Maria Montessori 『THE MONTESSORI ELEMENTARY MATERIAL』 Robert Bentley, INC, 翻訳：野原由利子 1965 p.309

注2：文部科学省2008『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.160

参考文献

- M・モンテッソーリ著, 菊野正隆監修 武田正美訳 1974『創造する子ども』エンデルレ書店 p.256
- E・M.スタンディング著, クラウス・ルーメル監督、佐藤幸江訳 1975『モンテッソーリの発見』エンデルレ書店 pp.323-324
- E・M.スタンディング著, クラウス・ルーメル編、佐野 正訳 1975『モンテッソーリ教育の道』学苑社 pp.122-126
- M・モンテッソーリ著, 安倍真美子 白川蓉子訳 1977『モンテッソーリ・メソッド』明治図書 p.279
- M・モンテッソーリ著, 常良訳 1980『子どもの発見』国土社 p.111
- M・モンテッソーリ著, 鼓常良訳 1981『子どもの秘密』国土社 p.145
- M・モンテッソーリ著, 鼓常良訳 1990『子どもの心—吸収する心』国土社 pp.203-216
- 日本大辞典刊行会編 2001『日本国語大辞典』小学館
- 三省堂編集者編 2003『新国語中辞典』三省堂
- 三省堂編集者編 2004『広辞林』三省堂
- 松野静子著, 佐野正監修 2013『よるこびの中に生きるモンテッソーリ教育』国土社 pp.375-383
- エックハルト・トール著, あさりみちこ訳 2016『世界でいちばん古くて大切なスピリチュアルの教え』徳間書店 pp.121-132
- 吉田典生 2016『心に静粛をつくる練習』WAVE 出版 pp.194-199
- 佐脇美姫子, 花家可菜子編, 早田由美子, 森下京子, 野原由利子, 島田美城(他7名)著 2016『現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践』KTC 中央出版 pp.177-189